

十八日の月に向つてふと故郷のことを思つた私の胸に、さつと旅愁が通り過ぎた。寝付かれない夜だ！ きりぎりすの音がいよ／＼耳について遂に涙となる。

憂鬱

丹田慶三

いけないと思ひながらも妹を叱る我が胸鉛の如し。
憂鬱な思ひに堪えて我は又、今日一日を過さんと思ふ。
憂鬱の心を持ちて歸りつゝ夕日は赤く道を照らせり。

ココアと議論

羽根田辰男

ほろにがきココア啜りて冬の夜にかじる林檎のうす甘き味よ
木枯の寒き今宵を三人してココア啜りつゝ議論せしかな
議論してかすかにふるふ我心小さき事に怒るくせあり
議論後に押しつけられるゝ沈黙なり述べし意見を繰返し見る
沈黙に食べよと出せし半切の林檎の影の妙に寂しき

風強き由井が濱邊に風揚ぐる混血娘の眼の青きをばみつ
夕風の由井が濱邊は混血娘の髪の毛色にはやうすれつゝ
振向けば松の交れる逗子の町赤き燈火のにじみ初めつゝ
暮れおちて火のつくころは砂濱に入去り行きて吾一人立つ
打寄する波のひゞきに這ひ出でし濱蟹あはれなりの小さし
ちろ／＼と穴にかくれてなか／＼に濱蟹出です海の日ぐれに
上潮に風のはげしき由井ヶ濱風音高く人影多し
上潮と共に吹き来る濱風にさびしきかなや磯松の音
吹き荒るゝ波の汀に上げられて長き昆布の色の濃さよ
立ち罩むる霧が下べに瀬の音のしげき底倉の朝ぼらけ良し
出てくれば夜をはなれぬ街道を湯に通ふ人すでに多かり
なめ石の浴槽に友とのびのびと浸りてあれば瀧の音しげし
山峽の深き谿間をとう／＼とたぎりて下る木曾の山水
崩え出づる青葉映して流れ行く木曾の流の水澄めるかな
白々と泡立ち流る木曾川に五月の山の匂ひうつれり
木曾川の丸木の橋を渡りつゝわがゆく汽車を見送れる子等
×
青梅を嚙りてあれば目に浮ぶ幼き頃の友の赤き頬
彼の友は梅を好みて食ひたりし死にし病は何病ならむ
冬枯れし細き山路を過ぎゆけば山鳩立ちて赤き實の落つ

冬空へはたはたとびし山鳩の翼光れり目にかへるとき
水のなき冬の磧の寂しさよ枯草の中に鴉降り来て
冬の日の白き磧に枯草のつゞける上に湖ののぞけり
水のなき磧の橋を渡り行く人影長し冬のうすり日



紀行文

第四學年關東地方修學旅行記

中 村 弘

五月三日 第一日、諸先生の御見送りを受け九時四十五分
出發。夕闇の内に住み馴れた彦根の町を朝夕仰ぐ彦根城の白
壁を氣笛の響と共に残して出發した「萬歳！」傷病兵を迎へ
る叫び聲が次第に遠く微かになつて行つた。そして窓外にち
ら／＼と赤い灯が見え、それも直ぐ後へ飛んで行き汽車は僕
等の楽しい心に乗せて闇の中を走る。併し同乗して居る傷病
兵等の心は僕等の旅行に較べて如何に寂しいものか。案外こ
んで席が分れて了つた。早や岐阜を過ぐ車内の隨所にはほが
らかな爆笑湧き返る觀聲渦巻くどよめき等起りとても愉快な
旅だ。

名古屋に着いた、未だ車中一泊の豫定を遂行する者もない
併しやがて疲れて寝る者もある假睡を幾度か汽車の動搖に妨
げられつゝ濱名湖を渡る。聽て眠られぬまゝ一時頃より洗面
所に行く者トランプをやる者雜談に耽る者等、皆元氣な胸の
中を爆發させてとてもにぎやかである。何時の間にか寢て了
つたらしくうたたねから自分に戻るとはや夜の帷幄も薄らい
で窓外がほんのりと白むで居る。今迄眠ることのみ焦つて
居た連中も飛起きる。見よ！ 車窓の右を、滿々たる太平洋
の漣が岸の眞砂に碎け一望千里の海上、曉の東天に眞赤な太
陽が朝靄に浮んでゐる景觀を。進めば増々明るく、夜は全く
明け切つて朝の冷氣が身に浸む。「富士山だ」誰かが叫んだ。
白銀戴く吾等が靈峯大芙蓉が北方幽冥の空に、嚴然と聳え、
淡緑の裾野が車窓まで延び、展開された若葉の緑が眩しく瘴
不足の眼を射る。聽て三島着、三島町まで輕便鐵道にて。驛
前にて點呼第二日の旅程箱根八里の踏破に向ふ。

西 村 久 雄

五月四日 三島町でしばらく休憩。勢揃ひして古人の歩ん
だ道の征服の途につく。前日の睡眠不足で稍倦怠を感じる併

し一同頗る元氣旺盛である。三島神社を越す頃より坂道になる。

町を出はすれるとそろ／＼松の大きが見えだす。越さんとする山も全容を見せる。更に進む。兩側の松も三抱位のものが見え始める。

植えられてから幾百年たつたかは知らないが長い間じつと立つて世の變遷を心靜かに見た事であらう。戰國時代から豊臣時代となり關原の戰で徳川氏の天下になり更に明治維新となつてあわただしい文化の進捗チョンマゲ時代から科學時代への急激な變化をどんな目で見たであらうか。老松は黙して語らず唯亭々として天外に聳えて居るだけである。

だん／＼登つて行く汗ばむ。ハンカチが濡れる。水筒が軽くなる。隊伍を整へて上る筈であつたのが一人後れ二人後れとう／＼乱れてしまつた。水を見付ては飲み木鹽を見付けては休みしてやつと笹原新田に着いた。しばらく休憩し勇氣を振ひ起して再び登る。行けども／＼松普木一つ峠を越したかと思ふとすぐまた次ぎがあらはれる、谷の間の緑の麥畑も桑畑も遠く拜し得る富士も魅力を感じない。唯だ苦しいだけである。山中新田に着いて元箱根まで何里だと尋ねたら二里半は充分あるといふ。「大變だ」「もう駄目だ」などといふ聲が

を越した。この次越せば蘆の湖が見えるだらうと考へて越し始める。だが越し終つた時何を見たか？ 相も變らずうねうねと續く道であつた。

それでもやつとこさと峠を越して蘆の湖を見た時は流石に嬉しかつた。

新緑の山々に圍れ透徹し切つた美しさを持つ蘆の湖には讚嘆の言葉を發せずには居れなかつた。だが足は依然として重く休は依然として綿の様である。

坦々たる坂道を下り始める。

箱根町へ着いた時先輩川島氏（蘆の湖遊船會社事務をして居られるといふ）の好意により箱根ホテルで休憩お茶を飲んだ。

箱根町は國際化した近代都市だ。昔その邊には馬追ひや駕籠昇などが凄い顔をして飲んで居た暗い居酒屋や紺の暖簾を下した旅籠があつた事などはとても想像出来ない。

そこを出て關所考古館へ行つた。大名士百姓町人の印鑑や手形關所鐵印御本陣鐵印などいふものを見馬の手形や女通行證文相違覺などいふ者を見た時には徳川氏の政策が如何に嚴重であつたかといふ事がわかり十五代續いた事も成程と首肯出來た。其の他關所に關する色々の證文や印鑑を見て川

聞える。新道へ入つては舊道に入り又新道に入る。舊道は案に相異して狭い。しかも石で疊れた歩るきにくい道だ。草の脊丈程に生ひ茂つた所などを通る時はあの講談で讀むやうな軍雜籠に乗せられた罪人や追剥を思ひ出す。

しばらく行つて道路修繕工夫に

「蘆の湖はまだですか」

「これから三里はあります。」

「これから三つ」

「あゝ死にさうだ」

とぼ／＼と心細い歩を續け淋しい舊道を通つて谷の上近くに來た時木蔭に休憩した。美しい段階狀の麥畑や桑畑の緑りが谷を埋めて居る。その向ふ遙か彼方に富士とその連峰が見えた。富士の偉容はいつ見ても崇高の念を起させずには居かない。

潤渴した元氣を振りしほつて歩む。林を出てすこし廣くなつた所に出た時晝食をして居る先頭に合つた。時に午前九時半、學校では一時間目の終りかと思ひながら飯を食ふ。全部集つたのでまた登り始める。どれがどの山だかさつぱりわからない。又隊が延びる。死ぬ様な歩みを續けて二つばかり峠

島氏の先導により箱根神社に參拜する。途中舊關所跡について川島氏の御説明を聞いた。今はただ門の石が残つて居るだけである。側に一本見返りの松といふ松があつた。やれ／＼通れたといふので振返つて見るから見返りの松といふのだといふ事である。元箱根に入るすこし手前の湖岸が蘆の湖で一番美しい逆富士（？）だと教へられた。今日は連波が立つて影が千々に碎けて居るが靜かな朝などは眞偽を辨じ難い位だといふ事である。

長い／＼坂と急な石段を登つて箱根神社に參拜し終つて汽船で蘆の湖縦斷湖尻まで行くのである。堤康次郎氏が殊に我々に御菓子を下され汽船の料金も只にして下された。

美しい水だ。澄み切つて居る。紙でも捨てるのが悪いやうに思はれる。しかもその湖岸まで迫つて來た山の緑と點々と交るつゝ影が映して何とも言へぬ位美しい。だが睡眠不足と疲れとでこくり／＼とあちらでもこちらでもやつて居る湖尻に着いた。川島氏にお別れを告げて遊船會社の社員の御案内で大涌谷強羅を征服せんとするのである。

木の間から洩れる午後の烈しい日光を受けて疲れた足を引きづつて案内者の後からついて行く。姥子温泉を過ぎ大涌谷に着いた。もう／＼と白煙が立ちこめて居る。きつい硫化水

素の臭に胸が悪くなる。ごう／＼と大地も振るはすやうな氣味の悪い音を後にしもう／＼たる白煙を背景にして記念撮影を取り強羅に向ふ。轉げ落ちさうな大石の下の頼りない道をとぼ／＼と行く。強羅公園に着いた時には心神共に疲れ切つてこの美しい景色に接するには私の心は餘りに鈍ぶつて居た。唯自然美の偉大さを深く感じただけである。とぼ／＼と牛の歩みを續けて宿に靴を解いたのは六時近くであつた。

旅館の二階でごろんと寝ころんで痛い足をなで朝からの難路を回想してもよく七里の山道を歩いたといふ事について何の偉大な征服感も起らなかつた。何者かが深淵に引き込む様な感じがしそのまゝ深い睡りに落ち入りさうな氣分に襲れた。でも後があるのだからと思つて風呂へ行つた。風呂の美しい事は此の上もなかつた。体を湯の中にどつぶりつけた時には朝から味ふ事の出来なかつたゆつたりした氣分を多分に味ふ事が出来た。

食後自由行動を許されたが見る程の事もない處だ。旅館へ歸つて寝てしまつた。旅行に有り勝な騒ぎもしないで。

橋 本 末 藏

五月五日 (第三日目)

の魅力のある事。沖には漁船の白帆がちら／＼見える。快晴の空には大きな風が幾つも／＼乱舞してぶん／＼唸りを立てゝゐた。子供が揚げてゐるなら何も不思議はないんだが、大人が何人もかゝつて揚げてゐるのだから一寸珍しい。しかも大きな風で疊六疊はたしかにあるやうに思はれる。嫌な唸り聲である。棧橋を渡つて行く。長い／＼棧橋だが江ノ島につく一町手前まで程しか下に水がない。勿論干潮の時でもあつたからだらうが、それでも砂嘴の發達の著しい事を目撃せざるを得なかつた。近き將來に於て此の島は標式的陸連島となる事であらうと旅行前の先生の御講義を思ひ出し乍ら考へる。棧橋を渡り切つて江ノ島に入る。石段を登つて幾つもお宮を経て、又石段を降りる。兩側の土産を賣る店の女達がやかましく呼び止める。みんな急いで通りぬけて次にや／＼こしい石の洞窟をくゞりぬけてや／＼こしい所に出た。海邊の岸上である。遙か見渡せば相模灘は春の光に渺茫とかすんで水天一髪。南に伊豆半島、北に三浦半島。遙かにかすみて浮び上り西南の山上一きは高く富嶽を見る。あゝ、其の神秘何と言はう。寄せ来る波は岩に當つて飛沫を揚げては去る。あゝ！其の雄大さ。すべてを忘れて恍惚として暫し其の眺めに飽かず見入る。岩上に腰を下して宿屋の辨當を擴げる。小蟹がちよ

朝早くからみんな眼を覺して騒ぎ合つた。第一に氣にかゝるのは天候である。起き上ると直ぐ欄干に出て朝の空を仰ぎ見た。おゝ何といふ嬉しい事だらう。空には一片のちぎれ雲さへ見當らず向ふの谷は朝靄の中に淡く鎖されてゐた。

朝食後少時にして出發少し道を登つて宮之下に到着、午前七時三十九分宮之下發の電車につまり込んで小田原に向ふ。谷底に居たやうだつたが之でも數百米の高地に居るのだからな。

電車が下降し始める。Z字形に何度も／＼曲りくねつてだん／＼降つて行く、深い／＼谷にかけられた橋の上或は果しなき如き絶壁のへりに添つて走る。恐ろしいやうな所ばかりでひや／＼する。約一時間後湯本着次いで小田原に向ふ。小田原着、省線電車に分乗して藤澤に向ふ。窓を明けておいても煤煙を吹込まなくて氣持がよい。みんな窓から顔をつき出してうつり變る車外の景物を賞玩してゐる。藤澤着。江ノ島行き電車に乗りかへて片瀬着。驛前の茶店に荷物を置き手輕になつて愈々歩いて江ノ島に向ふ。江ノ島、名は聞いてゐたけど行つて見るのは今が初めてなので、皆はしやいでゐる。海岸に到着。丁度干潮の時だつたので濱に降り立つて暫時休息。江ノ島は遙か彼方水の上に浮び全島新緑につゞまれて其

ろ／＼岩の隙間を這つてゐた。食後暫くして集合。前來た道を通つて歸る。昨日の疲れがまだ残つてゐるのか、石段を登るのが嫌である。又店の女共が盛に土産を賣りつける。片瀬に歸着、鎌倉行の電車に乗り込む。天井のない輕快といへば輕快だがクツションがなくて尻の痛い電車である。龍の口腰越等々歴史的に名高い地を通つて長谷着。驛の傍の横に荷物を置いて長谷の大佛様に參詣。山門をくゞると真正面に有名な露天の大佛様がおはしました。日本三大佛の一として其の名高き大佛様である。横の小穴から体内に入る。大佛様の脊中に小窓があつて明りが探つてあるが下の入口の所が眞暗でよくつまづく。階段があるので上つたがなんでもないものだつた。たゞがらんとしてゐるばかり。大佛様を背景にして記念寫眞を撮る。來た道を少し引返して右に曲り觀音堂に參詣。高さ三丈三尺とか、説明者が妙な口調で話した。國寶であるこれより長谷驛に歸り、鎌倉に向ふ。八幡宮前の旅館鈴木屋に荷物を置いて鎌倉古跡の見學。先ず鶴岡八幡宮に參る。鳥居をくゞつて神橋を渡り境内に入る。公曉の隠れたといふ銀杏がすぐ眼にとまつた。其の節くれ立つた根本に並んで寫眞を撮る。石段を登つて朱塗の門をくゞり、一同禮拜する。次いで靜御前の昔偲ばるゝ若宮堂及寶物殿を見學。道を建長寺

にとる。松田先生の御注意を思ひ出して其の屋根の格好を見る。國寶である。次で頼朝の墓に到る。林の中落葉につまれ若にうづもれて悄然と立てる頼朝の墓を見た時、英雄の末路を偲び暫し感慨無量だつた。其處を去つて次に鎌倉宮に詣づ。即ち大塔宮護良親王を祀る。宮の後方の山かけに土牢がある。致つて狭苦しい所である。此の中に半年餘の長き間もおしこめられ給ひ遂にあへなき御最後をお遂げ遊ばした宮を思ふ時言ひ難い思に鎖されてしまつた。猶少し木の下道を進むと大きな碑が立つてゐた。其の後方の笹藪の中に畏れ多くも親王の御首が捨てられてあつたといふ。此の邊だらうかと思ひながら、みんな笹藪の中を覗き込んだ。之より寶物を拜觀して後迂廻して旅館鈴木屋に歸る。時に午後四時前。九時半就床。

田澤 清 一

第四日 (五月六日)

鷄聲ほがらかに鎌倉の朝は明け初めた。空はどんより曇つて今日一日の天氣が氣づかされる(七時二十分鎌倉發)

この時吾等は「ユーモア」を演じてしまつた、と云ふのはう

る。左側に鋼鐵製の大建築物あり前面には新緑に彩られし小山を背景にして青い水を湛へてゐる灣あり。之こそ日本第一とまで誇る横須賀軍港だ。其の青水の上には巨物の坐するが如き諸軍艦が立錐の餘地なきまでに碇泊してゐる。その偉大さ雄々しさよ、案内者の話によれば上海事變直後に於てはさすがこの軍港にも一艦をも認め得ず唯青れてたゞふるのみなりしと云ふ。今碇泊せる軍艦は大概彼の事變に出征して國家の爲に大活躍せしものなり、其れが今や戰雲茲におさまりに輝く仁義の名高きアジアの日出の國に凱旋して大修繕が行はれてゐるのである。彼等は其の大事變の様子を物語る様に莞爾して我等を迎へてくれた。航空母艦巡洋艦等湖國に育まれし吾等には一として物珍らしからぬはない。一巡洋艦につき一通り軍艦の説明を聞く。右手には無数の機械を相手に火燃吹き出す側に眞黒になつて働いてゐる。それよりおこる騒音に説明者の聲も明瞭ならず、彼等は其の熱と騒音の中に御國の爲に力をさゝげて働いてゐるのだ。彼の巨大な軍艦も彼等の力より出来て居るのだ。こう思つた時吾等はその眞黒になつて働いて居る職工等に感謝せずには居られなかつた。工廠内には至る所にレーンが敷かれ荷は汽車によつて運ばれて居る。今まで曇つて居た空もからりと晴れて焼けつく様な日

かつにも東京行の電車に乗つてしまつたのだ。北鎌倉に着いた時車掌さんが「異ふから降りて下さい」と言ふ。はつと思つて飛び降りた時最早や電車は走り出した。プラットホームに立つて居るのは吾等數十人己である、而も先生が居られぬさあ困つた。而しどちらが本當だらうか？幸い鐵道地圖を携帶して居る者があり其には明らかにもう一度鎌倉に引返す可き吾等の方が本當だとゆう事を示してゐた。それでは次の電車で鎌倉に引きかへさう。吾等は本當の中にも一大不安を胸にいだいて次の電車を待つ事にした。電車は間もなくやつて來た吾等はそれによつて鎌倉に歸つた。とプラットホームには寺本先生一人しよんぼりと立つて居られる、それを見た吾等は小供の様な喜びにかられて先生を疑視した。先生は何か一言驛長にのこして同乗せられ一路横須賀へと向つた。八時横須賀着、驛頭にて他の一行を待つ事にした。彼等は吾等が北鎌倉に下車したのに氣付かず悠々と無賃乗車で横濱に行き之より引かへして横須賀に着いたのは約一時間の後であつた人員揃ふや直ちに軍港の見學にいつた。街路の兩側には上海事變出征者の凱旋門が建てられて立派な裝飾が施こされ事變の回想に足るものがあつた。軍港の門前には物々し警戒があり休憩所で一休みして之より二組に分れて工廠内の見學をす

光が輝き初めた。一通り軍港の見學を終つて之より山城軍艦の拜觀に行く。先づ靴や服のちりを掃つていかめしく警戒してゐる番兵に一々敬禮して艦上に上るデッキによりかゝつて四方を眺むれば彼の無数の軍艦は一望の下に眺める事が出来る。遙か彼方には何處から飛來せしか一臺の飛行機が盛んに宙返りをやつてゐる。艦上に一將校に軍艦に對するくはしき説明あり、之より二組に分れて記念撮影をす。次は艦内の見學！急傾斜の梯子を不安さうに下るなんだか洞穴の中にも來た様だ。白い服を着た水兵さんが油によごれた眞黒な顔をして働いてゐる。一室から一室へとかすかな電燈をたよりに歩いて行く内其の室内の蒸暑さにたへきれなくなつて來た。歩かなくても汗が流れる。何んだか息づまりさうだ。或室に來た時何んだか美味さうな香がして來た。何んだらうと思つてのぞいてみると肉や、卵焼き等が皿に盛られて晝食の支度が出来て居るのだ。十一時に近い吾等には實にうらやましかつた。一室ごとに案内者の説明があつた。一室又一室何處まで續くのだらう。或廊下の側に正然とかけられた銃、劍彼等のはあの上海事變に於て我陸戰隊の重要な武器となつて活躍したのだ。又或棚には見なれぬ行季が棚に重ねられてゐる。説明によれば之は水兵さんの一年中の衣裳ださうだ。そ

の中にはシャツ、上着等が三枚宛入つてゐるのだ。室や廊下で合ふ水兵さんは皆眞黒な人であり鬼をもくじかんとする様な顔つきであるが而し其の中には實に質朴なる様子が含まれてゐて「何處から来ましたか」と尋ねて下さる方もあつた。この息ぐるしい様な中で御國の爲に一身を捧げて働いて下される水兵さん。吾等は今更彼等に感謝せねばならなかつた。やうやくにして暗黒の世界より文明の世界にたどりついた時余は今更生きかへつた様に艦上に立つて我等の幸福をつくづくと考へた。艦上には焼付く様な日光が照付けてゐる。見學の爲に來た中學生や小學生も澤山居た。

やうやく休憩所に歸つた時吾等は急に渴を覺えて湯飲場にかけて行つた。番茶に腹を肥して一憩の後十一時二十分思出多き軍港を後にして電車で東京に向つた。

車中で晝食を濟まし、東京に着いたのは午後〇時十八分であつた。東京驛には多くの先輩が來てゐられた。約一時間休憩の後二時多摩御陵參拜の爲淺川に向ふ。淺川着三時より數臺のバスに分乗して御陵前下車。兩側には樺の木が新緑に彩られて竝ぶ並木がある。之より徒歩にて御陵に向ふ。樺の並木は杉樹に變じてその森嚴さ其の壯嚴さ言語に絶す。所々に撮影禁止の立札あり。御手洗所に手を清め口をすゞぎ

寢をした日は今までになかつた。七時には食事をとり八時僕等は十臺餘りの自動車に分乗して大東京見學のスタートをきつた。

期らかなエンジンの音と供に柔らかな感じのするアスファルトの上を車は滑つて行く。道路の兩側の楯比する建築物その下の歩道の人等に或る種の魅惑と複雑な感じを受けながら何時しか數多くのコーナ―を廻つて車は進む。間もなく淺草に着く人通りは全く蟻の食物にたかり集つてゐるやうに頻繁になり劇場活動寫眞館等娛樂機關は斷然多い。僕等は車を降りて淺草觀音堂に參拜。すべてが目新しい東京の建築物中に此だけは徳川時代江戸の面影が浮んでゐる。震災の折にも類焼を免れたのも觀音様の御利益だつたのだらうか本堂は將軍家光の建立したものださうだ。僕等は堂の側面から行つて仁王門をくぐつて仲見世と云はれてゐる參道の方に出た。門には馬鹿に大きな提灯があり目を引く。左に豪傑久米平内堂があつた。此處では地方から見物に來た人々の姿も多く見える再び車上の人となること五分許りで震災記念堂に至る。被服廠跡だ。此所で僕の心は暫し思はず釘づけされてしまつた。何うして自然はかくも悲惨なことを起さしめたのだらうか一瞬間にして六萬の生命が奪ひさられたとは餘りにも悲惨だ。

一同社前に整列す、今や先帝陛下崩御あらせられて以來星霜實に七週年、吾等は何の因ありてか今この御陵に參拜して先帝陛下を忍び奉る事が出來たのであつた。再び自動車で淺川驛に引返し四時上野に向ふ。上野に着いた時は夕暗せまる六時であつた。電光燦たる地下をくぐつて地上に出て、東京館に向つた。そして吾等はこちらにあこがれの東京、希望滿々たる大都に第一歩を踏み出したのであつた。

山本高治郎

五月七日（第五日）

目を覺ますと五時半を過ぎてゐる。皆此の三日間の旅行で相當疲れたらしい、未だぐつすりとならぬ。併し大都市特有の喧噪は遠慮なく僕等の耳に襲つて來てゐた。朝つぱらから喧轟な音を聞くことは田舎者の僕の耳には少からず異常に感ぜられた。屋根裏の都市名物の一つの物ほし臺に出てみた。屋根と屋根との間にはコバルトの空の中に白雲がふはり／＼と覗いてゐる。今日も又旅行日和僕等は恵まれた旅行の幸運兒なのだ。やがて宿の男が出て來て蒲團をたゝみ始め順々に目をこすりながら起されて行く。實際今日のやうに朝

堂は日本風の設計に鐵筋コンクリート造である。堂内の繪畫を見て行くと心は次第に暗くなつて行き當時の慘狀が偲ばしめられるに充分であつた。自動車は之から更に走り兩國橋を渡り宮城に向ふ。此所にて先づ我等を迎へたものは巍然たる楠公銅像であつた。宮城の松の緑の中にくつきりとした姿が向ふに見えた。廣場を横切つて二重橋前に整列して禮拜したあたりは嚴然たる雰囲気包まれ二重橋の濠の水に影をおとし柳の風になよ／＼としてゐるのも馬車が白砂の上をゆるやかに走つてゐるのも奥深い感じがした。廣場の西南隅から櫻田門の方に出る。水戸浪士の爲井伊大老の最期をとげられた所で白色の新議事堂が聳え參謀本部の屋根も見え角には警視廳が見える。濠に添うて暫く走り日比谷公園のコーナ―を廻り一路直線コースを取る。右にはAKのアンテナが見えた。數十分にして車は泉岳寺前にストップ。もうこれで市の中央部からも相當遠ざかつたのか人通も漸く少くなつた。道の兩側には土産店が美しく列んでゐる。境内に入ると南方に高地があつた。此處に義士の英靈は香しく立ちこめてゐる線香の煙と共に永久に眠つてゐるのだ。此所で晝食を取つた。暫らくの休憩の間に境内をあちこちして見ると目に入るすべての物で義士に因んでゐるのに驚く。商賣の種に義士は完全に利用

されてゐる。非常に齒がゆく感じた。十二時二十分再び車上人となること十分乃木邸に至る。將軍の日常の御生活まで種々の遺物の數々に推量せられる。如何に將軍が質素で生活されたかまざまと目に浮ぶ。邸に接して乃木神社があつた續いて明治神宮に参拜。参道が天も摩する杉の大森林に挟まれて續いてゐる。僕等はこれでも東京かと疑つた。全く靜かで足の音がざくざくと参道に敷かれた玉川砂利に音するだけである。一同無言の儘参拜を済ませ此より神宮外苑を徒歩にて通りすぎた。日はもう五月空に暑さを振りそゞぎながら輝いてゐた。水筒の水がなつかしくなり出した。車は上野目がけて歸路についた。途中下車九段上靖國神社に詣づ。維新以來の戦役の折陣歿の將士の弔祭されてゐる宮。先づ大きな鳥居があつて目をひく。多くの銅像が見うけられたが、大村益次郎のもの他は誰のか忘れて了つた。彼だけは維新の英傑として僕の脳裡深く刻みつけられてゐる。社側には遊就館があつたが拜觀出来なかつた。二時過ぎ自動車は宿についた。疲労も忘れて車から跳び降りる。一日の旅程も恙なく過ぎほつとする疲れを休める事無く僕は叔父の家に向つた。何のとりとめもなく叔父に案内せられて歩き廻るうちに大東京市はいつのまにか暮色に包まれてゐた。ネオンサインが輝き出し

た。あちこちと土産物もあさつた。もう夜だつたけれど遭ふ人々は皆一かどの近代人らしい顔をしてゐる。歐米建築の粹を集めた建築物が高く電氣を輝かしてゐる。東京の夜景は愈々複雑化して行く。僕は九時三十分宿に歸つた。誰もの土産包みが急に多くなりだした。十時就寢。

相場 徳三

五月八日 (第六日、日曜日) 雨

五時三十分起床、上野驛に行くと同田先生が大学生姿で出ておられた。もう一日との思を残して八時二十分上野發車日光に向ふ。

汽車が栗橋といふ驛を過ぎる頃、始めて山が見え出した。關東平野がだん／＼盡きて行くのだ、野田附近で醸造工場を多く見た。武蔵野も通つた。日光に近づくと有名な杉並木が見えた。高い杉の木が、一木づゝでも堂々たるものが、ずうと立並んでゐる。此の並木は延々十里にわたるものである。貧乏大名の東照宮への献上物だ。

十時五十三分日光着。上野を出る頃から怪しかつた天氣はたう／＼雨になつてしまつた。こゝから電車に乗る。此の電

車は大へん古くて鈍く、極端に言へば歩いて行く方がましだといふすばらしい電車。我等の宿神橋宿前で降りる。例の如く宿に持物を置いて東照宮に向ふ。

雨は漸く激しくなつて來た。暫く行くと所謂大谷の急流が岩うつ所に、木の縁に映えて朱の色も鮮かな橋がかゝつてゐる。これが神橋である。但人は渡れない。雨の中で又紀念寫眞を撮る。それから兩側に木が茂つてゐる参道が續いてゐる云ふまでもなく東照宮の祭神は徳川家康である。

「日光を見ぬ内結構といふな」とはよく人の言ふ所であるが、成程美しい。贅澤な程美しい。建物は朱塗で塗立のやうだし、門々所々の金具はきら／＼と、至る所彫刻があり、繪畫を見られる。折悪しく雨がひどくて充分結構な氣分になれなかつたが就中陽明門が一番美しかつた。唐門も美しい。併し天下の名作左甚五郎の眠り猫はそんなに感心しなかつた。人に聞いても多くの人はさう言ふが、自分が見ても同じ事だ大猷廟即ち家光の廟も拜觀した。これは元祿時代に完成したので、東照宮とは優美だから氣をつけて見よと言はれたが、よく目につかなかつた。東照宮の拜殿で説明者が言つたが、世間一般には東照宮の建築費用が諸侯の寄附金が主となつてゐる様に思はれてゐるが、實際は家康の遺金が主であるさう

だ、遺金であれだけ出来るとは莫大な遺金だ。それから最も不思議だつたのは輪王寺の樂師堂内の天井の狩野安信の筆といはれる龍の繪があるが、その眞下に立つて手を打つと天井に響いて鈴の鳴る様な音がするのである。我等は寺川先生の實施せられたのを聞いたが、口では言へない音で全く不思議である。大學から來て研究するさうだが、未だ原因が分らぬさうである。

中禪寺湖へは希望者だけ行つた。自動車で一圓かゝるといふので多くは行かなかつた僕も行かなかつた。雨の降るのを残念に思ひながら宿へ歸つた。うすら寒さを感じて火鉢を圍んで雑談に耽つた。夕方間を散歩してつく／＼道の悪さを感じた。彦根の道と同じ様な道だ。雨の音を聞きつゝ十時就寢

浅島 昭

第七日 (五月九日) 晴

嫌な雨もからりとはれて、我等の前途に、光明が浮んだ。未だ人通り少ないすが／＼しい朝の日光に別れを告げて、六時四十八分我等が汽車はプラットホームを離れた。車内はハイモニカを吹くもの、トランプをする者、雑誌を

讀む者等皆思ひ／＼の事をして無聊に苦しむ時を過ごしてゐた。

飽き／＼する汽車の旅だ！ 七時三十八分宇都宮着「宇都宮々々々」とスピーカーがわめ／＼、さすがは宇都宮だけあつて大きなところだ。こゝで小山の列車に飛び込んだ。

七時五十分汽車は音もなく滑り出た、相變らず單調な汽車の旅だ！ 然しうと／＼してゐる内に小山に着き、こゝにて中央線に乗り換へた。足利過ぎ前橋來りて、高橋にて乗り換へいよ／＼地理に名高い碓氷峠にさしかゝつた。

これより先汽車は後方に電氣機關車三臺を連結して、ゆるゆると峠を登つて行く、じり／＼と絶壁に沿ひ、青々たる山に臨み、峽谷にかゝる鐵橋、山を貫く隧道を経ること二十六度窓外に展開された景色は實に雄大壯麗、全面皆緑の山肌が間近に迫る、自然の雄大さ、いふばかりなし。

ふと右手に蒙々と煙を噴出する山が見えた。淺間山だ！

この地方有数の大活火山だ！ やがて小諸過ぎ、上田過ぎて歴史に名高い川中島を右手に見て長崎着。時に午後五時〇一分。荷物を宿屋さし廻はしのトラックに預けて、善行寺參拜の途についた。

やがて嚴めしい大正七年に再建されたと云ふ二王門をくぐ

の田を眺めつゝ吾等が汽車は走る。その廣漠たる田の果には清江一曲村を抱いて東北に悠々と流る、トンネルを出づれば姥捨である、左窓に見ゆる階段状の田は「田毎の月」と言つて往昔水が湛へてあつたと聞く。姥捨山は觀月の勝地にして芭蕉の句に「おもかげや姥一人なく月の友」と。大小の隧道を通る事数を知らず、或は速く、或は遅く、行く所千紫萬紅西條驛を過ぎて右窓を覗けば白雲裡の日本アルプス雄大そのもの、如く吾等の行手を阻まんとす。犀川の溪流に沿ひて走る事須臾にして棟を並べ鬘を争ふ所に松本城巍然として雲霄に聳ゆ。松本驛に於て後に連結された名古屋行の車に乗り換へる。朝飯の早かつたせい未だ九時にもならぬ中に皆んな辨當を食べてしまつた。鹽尻驛着九時二十五分、甲府商業生乗車し車内一層賑やかなる。十数分後汽車は鹽尻を後にする。山紫水明絶壁浪を碎く川邊や秀麗の山容は到る所に散在し隧道を出づる毎に景忽然として變る様な眞に奇異にして恍然として目醒む。

木曾福島附近より右方に銀びかりに輝く壯嚴な御岳の勇姿儼然として群山を抜き左方には駒ヶ岳これに對峙してゐる。

上松驛を過ぎて寢覺床を備して見れば河幅狹窄し一波動きて萬波皆従ひ細鱗踊つて花崗岩を刻み怪岩時ち數多の窟穴、

り、一光三尊の阿彌陀如來を安置する善光寺へ參詣した。

自然と頭の下る思ひ／＼と身に迫つてくる。掃き清められた境内、高く聯ゆる善光寺、兩側の樹木、それ等どつしりした壯麗な眺を見た時、動かすべからざる感に打たれた。

善光寺を出で左手に往生寺を見て、一望千里人口七萬の長野市を見渡す一小丘に出た。恰も彦根の城山より見たる景色に似て、そぞろに故郷の景色を思はしめた。

六時過ぎ旅館着。例の如く夕飯後は自由行動だつた。

この町は完全な佛閣都市だ。善光寺あるがために發達したのだ。善光寺なくして何が得られよう？ 善光寺を除いた他は何も見ろべきものとなない單調な都市なのだ。

あちらこちらぶらついて、疲れた体を短かいふとんに托して眠についたのは九時少し過ぎであつた。

杉橋均五

第八日 (五月十日)

午前四時半起床、こゝ一週間の睡眠不足の爲今朝は馬鹿に眠い。拭ふた様な長野大門町を嬉しい様な悲しい様な寢惚顔で驛へ急ぐ。午前六時廿五分長野發右方に山、左方に急斜面

岩面に刻まれ萬馬天を蹴るが如く、風光絶佳にして車行眞に痛快なり。内務大臣指定の名勝と聞く。行けども行けども左右依然として山又山その間發電所二つ三つ見受けた。兩側削るが如く水勢矢の如き木曾川に沿ひて汽車はどん／＼下る。千山萬嶽遂に行き盡し中津川驛附近から漸く左右の山開き木曾川に別れを告げて、これより樂々と濃尾平野の眞中を名古屋目指して走る。定光寺驛よりフルスピード右に揺られ左に揺られ好い氣になつて眠つて終ふ後は無念。

大曾根を過ぎし頃ふと右窓を眺むれば遙か前方に名古屋城がぼんやり見え始めた。名古屋着午後三時三十分東海道線にのりかへ四時四十五分發車穂積を過ぎ大垣にさしかゝる折柄西の山々に垂れかゝつた薄赤く焼けた雲の色が刻一刻と褪るにつけ、空の星の光が強くなり其の数が次第に増した。四邊は薄暗い闇に鎖された、窓側に凭れて靜かに目を閉づれば樂しき過ぎし日の事。今は思ひ出となりて腦裡を掠めるばかりである。俄然墨繪の如き伊吹の秀峰右窓に現る柏原、近江長岡、醒ヶ井、米原——「城山が見える」「彦根城だ」「美しいなあ」何といふ懐しい言葉だつたらう「やつぱり彦根が一番好いなあ」聽て汽車は彦根驛に勢よく停車する、驛前で萬歳を唱へて解散する。斯くて待ちに待つた吾等が旅行も遂

に終をつけた。



母校の諸君へ

卒業生 浅島 希 一

早や歳の暮が眼前に迫つて来ました。そして新年を迎へればもう卒業進級入學の三月です。そしてこの拙い文が諸君にお目見えする時です。

卒業後二年近く、その年月をただ無意味に過した僕として甚だ僣越な次第ですが、今年も亦無味乾燥な通信文を送らして戴きます。

僕は今蒲生郡宇津呂村の煙草販賣所に勤めて居ります。「名古屋地方専賣局宇津呂煙草販賣所」といへば如何にも立派に聞えますが、實は元賣捌人の營業所をそのまま借入れたので普通の商店向の住宅です。

らされたものです。

自炊生活——それは將來諸君も幾人か經驗されるだらうと思ひますが、若き昔の思出としていゝ語草にならうと思はれます。冬の寒さと、夏の腐敗性が我等自炊生活者の最大の脅威です。冬の寒さは火さへ起せばそれでよろしいが、夏はものはすぐ悪くなるし、乾物類やすぐに食べられるもの即ち煮締物などはないし、辨當等も今の様に二食とも持つて行く事も出来ず、随つて食堂などで食べる事となり経費はとみにかさみます。

僕の一ヶ月の入費は雑誌書籍代や臨時費慰安費交際費雜費何もかも混せて約拾五圓見當、汽車通勤すればもつと安くするわけです。

煙草の販路を開拓すべき地位にありながら僕は煙草を好みません。當年——越えて二十歳の僕ですから法律上喫ふ事は出来ませんが、それよりも僕は入所前から煙草に對して或種の敵意をいだいて居つたものです。

煙草の人体に及ぼす影響、煙草による火災の被害、日常経費の増加、時間の空費等を考へると、煙草程やくざなつまらないものはないと悪い方面のみに對して考へて居り、將來自分分は酒と煙草は絶対飲(喫)まぬと固く誓つたものです。

昭和六年七月一日、煙草元賣制度廢止、直營實施が斷行せられた際に役所として新築の運に至らず不取敢借したるので現在では官廳とは云ひ乍らみすばらしいものです。

僕と所長と配給員が二名といふ僅の所員で煙草の配給區域は蒲生郡西部一町九ヶ村野洲郡東北部六ヶ村の十六ヶ町村、區域内の煙草小賣人員約百六十名、一年の煙草賣上金額約十七、八萬圓といふのが所の大勢で名古屋専賣局管内八十八ヶ所の販賣官署中中位に位して居ます。

滋賀縣には煙草販賣官署が彦根、大津、長濱、八日市、草津、水口、宇津呂、木之本、今津、安曇、日野、堅田の十二ヶ所あり。彦根以外は煙草販賣直營實施と共に煙草賣渡専務の爲に新設されたのです。御存じの通り彦根は出張所といひ煙草の收納、製造並に販賣及鹽販賣、專賣取締などをやつてゐます。

それはさうと、僕は七年二月に雇員として採用され、今日に至つたわけですが、所員少く萬一の場合を慮つて、汽車通勤は一ヶ月でやめ、三月以來當地に下宿して居ます。それも自炊生活です。

四月から七月までは算盤稽古に夜學へ通ひ、仕事の忙しさと自炊と夜學とで、かなり身体を使ひ二度も病氣臥床し、弱

それが所もあらうに専賣局へ入つたのです。始め、僕は何だか憐れたい氣がしてなりませんでした。

そして其後も煙草を峻拒して來ましたが、喫まうか喫ますに押通さうかと色々考へた末、煙草の喫味をも知らずは專賣局の一員としての資格に欠けるものがあると悟つて、煙草の喫味について研究して見たけれど、結局僕は煙草を好む氣になれず、又もや「喫煙せざる專賣局員」として押通さうかと思案中です。

酒も全然飲みません。酒宴の席へも度々列しましたが、飲んだ事もなく、正月の屠蘇さへもです。つまり嫌ひなんです併し之も將來このまゝ押通せるか頗る疑問です。

今のうちには嫌ひだといへばそれで別に強ひてすゝめる人もありませんが、一番困るのは主人となつて饗應する時です。客として受ける時も至極難物でせう。さういふ場合にことわる事が果して出来るかどうか。遠い話ですけれど、氣になる話でもあります。

所長は姓を内片といひ判任官です、同じ彦中出身の敏腕家で長らく彦根出張所の事業係に居て專賣取締事務や鹽の販賣係をして居られ縣下知らざる所なき足跡の持主で、僅に高島郡高島村を残すのみとなつてゐるさうです。

皆に理解があり、親切でスポーツマンで使はれるものとして、は實に理想的の人です。

配給員や雇員は中等學校卒業以上のものでなければ採用されませんが直營實施の際であつた爲大半は煙草元賣捌人使用の人々を試験の上特別任用してあります。宇津呂の配給員も一人は野洲、一人は宇都呂の元賣にゐた人で前任の雇員も元賣にゐた人です。

僕と蒲生郡——これは中々因縁深い存在なのです。第一僕の生地は八幡町です（本籍は彦根）郡内に三軒親類があり、母の實家も蒲生郡です。父が蒲生郡役所に長らく勤めてゐた關係から友人知己も多いです。

さういふわけで、僕の八幡赴任は一寸墳墓の地へ還るやうな氣がしたものです。

煙草の商況を通して見た八幡町及管内の概況を一寸語りませう。

縣下で目下發展しつつある町といへば先づ堅田、石山次で守山、草津、八日市、彦根だらうと思はれます。

反對に殆ど發展せずむしろ衰微する方の町は、八幡、土山、日野、石部、野洲があります。

就中八幡は其の筆頭で長らく人口も増加せず、沈滞しきつ

金持が多い結果、奥様や女中の買物外出はなく、御用き、即ち行商々賣、掛商賣が大部分で八幡に於ては現金商賣は全然駄目、嘗て市場の出來た事がなく、大賣出しが賑はうた事がありません。人口一萬近い町に市場一つないのです。

この所彦根と八幡は正反對です。彦根は縣下で市場の一番發達してゐる町、一番物價の安い町、一番競争の激しい町です。八幡は反對です。物價は平均一二割高、五割も高いのがあり、汽車賃を使つて彦根へ買ひに行つてもいゝやうなのがあり、従つて町の人々はよく京まで買物に出ます。金持が多い割にいゝ品物や煙草が賣れぬ理由です。

揚子や塵紙バケツまで行商する町も一寸珍しいではありませんか。

第三に位置が悪いです。奥に八日市とふ大敵をひかへ、西に守山、江頭、南に下田、東に安土、武佐をひかへてゐたのでは人の集るわけはないです。その上船着場はなし八幡驛からは半里も距つて居り下ととも島村だけなんです。名所名物は長命寺とその千日會及左義長祭位のもので、野球大會一つあるではなし、仕様のない所です。

主なる建物は八銀本店、百三、不動、明治各支店、稅務署、警察署、小學校、女學校（町立）八幡商業、八幡製紙、近江

た此の町の空氣は全くお話にならぬものです。

何故八幡は發展せぬか？

八幡は昔から金持の隠居地となつてゐます。西川甚五郎、西川庄六、森五郎兵衛の御三家（町民のつけた尊稱）を始め大小數多の金持が京阪。働いては金を持つて歸り、こゝで靜養するのです。従つて彼等は町が發展して騒々しくなる事を好みません。町の發展は彼等近江商人にとつてこの所大敵なのです。金持達は町の實權を握つて居ります。即ち御三家は町入費の三分の一を負擔し、二十數軒の之に次いだ金持へ（之等とても他の郡へ行けば無論横綱です）が三分の一を持ち残り三分の一を何千人の普通町民が細く分けて負擔してゐる状態ですから、何事をするにも御三家を始め金持の承諾を得ねばならぬわけで、これが八幡が發展しない最大原因となつてゐます。金持がある爲町民は至極暮しよく平和に日を送るのみで時勢の波に取り殘されて行く感があります。

今度の八幡宇津呂の合併にも金持は反對です。丁度彦根と青波、松原、北青柳の關係の如く周圍を宇津呂、岡山の二ヶ村に圍まれた八幡は丸で袋の鼠で手も足も出ず、どうしても合併せねばならぬのですが、金持の指金で八幡は結局衰微の一途をたどるのみです。

帆布本社及工場、郡農會、八幡公園、近江ミツシヨン經營の近江療養院、同建築事務所、役場、公會堂位のもので、

ミツシヨンは全國メンソレータムの總元締です。

この中小々意張れるのは小學校、稅務署、八銀、八商及ミツシヨン位のものでせう。

驛を町から遠ざけたのは愛知縣の岡崎と同じで、明治初年東海道線開設當時振動の爲家がいたむとか、騒しいとかいつて遂にすつと半里も距つた現在の地へつけてしまひ、後になつて後悔してゐる始末ですが、哀れなのはこの驛前宇津呂村間の暇にいつになつたら家が立並ぶのか解らぬ事です。

八幡は全く十年前も二十年前も同じさうです。

新聞とても旬刊が一つ月刊が一つ位あるのみで、八日市の様に日刊に非ざる新聞十幾つを數へるのも困りものだが、こゝも困つたものです。つまり記事がないのです。大朝、大毎共に文泉堂がやつて居り號外配達に小母さんが日傘さして行くのなど去年の暮僕自身が経験したあの物すごい配達競争とは打つて變つた光景に苦笑させられます。

彦根の恵比須講の盛なのは一に交通にめぐまれてゐるからといへませう。彦根は名古屋、京阪、北陸の合さつた三留地點であり、商人や香具師達の猛烈な競争地なのだからです。

管内百六十名の煙草小賣人中最高の賣上を示すものは八幡驛の賣店です。當驛は呼賣なしですけれど斷然一等で一ヶ年の煙草賣上高は約參千圓。だが堅田町あたりの壹萬圓から賣る店とは問題になりません。名古屋の松坂屋が年拾參萬圓で名古屋管内の筆頭らしいです。

僕は就職後小賣店を一二度巡りました。草津へも八日市へも五箇莊へも將又下田へも自轉車を飛ばしました。自轉車旅行は最早珍らしい語草でなくなりました。一日乗り通して八時間も馳け廻つた事もあります。

最後に自作の拙い煙草俳句を書加へて置きます(定價順)

きざみ

西山やその名も高し水戸義公(水府)

思ひ出や幼き頃と薩摩芋(薩摩刺)

白梅の散り敷く宵や月淡し

宮詣で笑ましげに咲くさつきみち

泥沼に楚々たる姿あやめかな

萩の花垣根に白し神無月

早苗取る大和撫子影ほのか

人の世や名ばかりよくて富貴煙(貳拾八錢の刻煙草)

口付

たより

古川傳三郎

僕は其の後日本デンマークで有名な三河平野の中心地徳川家康が生れたと云ふ安城と云ふ小さな町に住んでゐるので未だ當方に来て間も無い事だし大へん落着いて家にはかり居るから精密な事は知らないけれども珍らしい事を御知らせします。

日本デンマークそれは農業をデンマーク式にやつてゐるから付いた名稱なんです。共存共榮を主意として絶対に個人が動かない皆んなで行動を共にします、所謂組合組織になつて居りまして組合が責任を以て農産物の處分を致します。

人間の氣質はごくアツサリして居るのです。よく働いてよく遊ぶのです。だから江州の様に金満家は居ない代りに失業者もゐない。働く能力を失つた俗に云ふルンペンと云ふ奴がゐるのです。變つたのには皮膚に入墨したゴロツキ連が居ることです。

で、僕は此の町で何をしてゐるかと申しますと呉服屋の小僧をしてゐるのです。彦根の川原町に北川クロヘイと云ふ呉

麗かに陽炎燃えて春日かな

宗觀公命を捨てし國の華(國華)

不二一つ國の誇に親父かな(製造廢止品)

敷島は松の緑も千歳かな

残雪のまだとけやらで彌生かな(製造廢止品)

秋深くみのりも深し黄金の田

朝靄にほのかに浮ぶ朝日かな

舗装道寒げに響く下駄の音(新發賣)

カメリヤ(椿)の彩りも濃し彦根城

兩切

琥珀色東雲の空後光さす

健やかにホープに満てる大滿洲

馬機銃、大砲タンクや飛行船(エアーストップ)

ひらくと故なくも散る櫻花(チエリー)

白百合の優しき姿併せ見む(リリー)

傘すたれ猫も杓子もバットかな

曉や残月淡く星かそか(新發賣)

菜の花の敷く毛氈や胡蝶舞ふ

丈夫のほまれも高し錦西城(軍隊のみ用ふ)

服店があるでせう、丁度あの位の大きさの店です。店には何でもございまして——とやり出すと宣傳になりますから止るとききます。呉服部、洋服部、文具部、文藝部等々あるのです。店の主義が女學生主義です。

僕が一番困つたのは女學生が五年間にやる着物の裁方をたつた一日か二日の内に頭の中に入れなければならないことです、之には全く弱りました。

その次に困つたのは朝から夜中迄キチンと坐る事です。これには弱ります。足がシビレて、動けなくなります。これは一萬米マラソンより体にこたへるのです。

併し此所がガマンのしどころで、在學中鍛へた身心、赤鬼魂を發揮してチツボケな店に彦中魂の發揚に餘念がありません。これからどん／＼頑張ります。

卒業後愉快に想つた事は近江商人が全國否世界各國に活躍してゐる事です、力強いのです、僕も將來世界に雄飛する覺悟です、どん／＼海外に發展しなければならぬのです。その爲には資本となる体を作り上げねばならない。鍛へねばならない、運動をやる事は身體を鍊る事であるが、身心共に鍊られて行くそれが運動家の持つ特點です。諸君は他日活躍に使用すべき資本——体——を作ることが目下の急務と想つて

みます。

正義に生きる事が學生時代に育まなければならない駄目です。今でも僕は間違つた道理の合はない不公平な事は大嫌です。そんな時は何時も反對の手を真先に上げるのです。これを社會人は稱して學生氣分と申します。併し正義に生きる事はどれだけその人間の勇氣を奮はし明るい其の日々を送り得るかそれは正義に生きる者のみの味へる特點です、正義の前に敵は無いと學校で教はります。

併し社會は矛盾と間違ひが有像無像とあるのです。その中で正義に生きる人の姿は輝いてゐるのです。社會は矛盾と間違ひだらけだと考へてゐたら、例へ一つ二つの矛盾に全神經を働かせなくともよいのです。自己自身正義に生きる時、始めて光りを生じます。正義は中等學校で養成しなければならぬ。他に養成する所はありませんと想ふのです。

僕の中學時代に育まれた正義感が一番よく現在に間に合ふのです。どれだけ虐待されようと、反抗されようと、屈せず進み行く正義感！ピカツと光つてゐる人達は正義に強い人達です。

最後に安城俗詠を紹介してさやうならをします。

安城俗詠

- 一、日本デンマーク 三河の安城 町にや メロンの花が咲く
- 二、明治用水 聞いたか見たか 水の流れが百五十里



部 報

剣道部々報

明治神宮全國中等學校剣道大會滋賀縣下第一次豫選大會出場の記

我等チームの初陣だ！ 四月以來營々として鍛へに鍛へた腕を以つて我等は陣頭に駒を進めんとしてゐるのだ。六月二十六日の初夏の風は心地よく戰士の頬を撫で去る。充實した氣力と、百戦練馬の腕を以つて大津武徳會支部に乗込んだ。第一回戦は不戦勝となつた皆の張りつめた氣が一寸挫けた形だ。第二回

戦は縣下の強豪八幡商業だ。相手にとつて不足はない。戦績次の如し。

第一回戦 不戦勝
第二回戦

八 商	本 校
大 馬 場	山 本
喜 多	大 原
◎◎◎山 本	平 居
木 村	◎◎清 水
先◎ 小宮山	○ 西 村

先鋒西村初陣なれども氣勢物凄く見事得意の面を先取す。併し二本目續かず涙を呑む。次將清水勇を鼓して善戦し、得意の面で小宮

山を倒し、續く木村も同じく面で撃破した。次に起つた山本をも勢に乗じて倒すかと思はれたが、惜しくも戦ひ上手の山本の爲に遂に敗られた。平居、大原善戦せしが、之亦敗を重ね我軍の勢とみに揚らず、大將山本一氣に回復せんものと悪戦苦闘せしが、戦我に利あらず遂に我等は敗戦の將となつた。斯くて我等は初陣より敗將の苦痛を味つた。併し今後に於ける大なる教訓を得た。我等は互ひに勵ましつゝ、今後の試合に奮勵することを誓つた。

彦根高等商業學校主催

近府縣中等學校劍道大會

出場の記

初秋九月二十三日、金龜城下に於て我等の血を沸し心を躍らせる高商主催の大試合はやつて来た。雪辱の時は来た、我等は天を衝く意氣と自信に溢れる腕を以つて戰場に進んだ敵如何にと待てば？ 六月以來恨み重なる八幡商業だ。雪辱！雪辱！我等が士氣はいやが上に揚つた。第一回戦は又も不戦勝だ。併し毫も我等の意氣は減じない。戦績次の如し

第一回戦 不戦勝

八商	本校
馬場	山本
山本	大原
喜多	加藤
岡田	平居
木村	清水

先鋒清水は木村とは再度の顔合せだ。清水立上るや寸時與へず攻め込む。敵もさるものバツト去つて清水の籠手へ！ 清水引き抜いて面へ！ 否其の瞬間敵の打ちし籠手はきまつて籠手あり。清水あせつて打込むを又も籠手を取られて退く。次將平居バツト退がつて陣を取る。木村ヂリ／＼攻め込む、平居大事をとつてか攻めず、その劍先がビリ／＼と微かに動く瞬間、平居は敵をまどはんとしてか右に劍を位せんとした間髪！ 敵よく攻めて籠手へ！ きまつて籠手あり。斯くて平居敗れ、中堅加藤すつくと立つて陣取る。籠手を外して面を切るか、敵をひき寄せ籠手を切るか、我等の期待は中堅加藤にあつた。今か今かと加藤の一撃を待つ。敵木村は二人を倒した勢を以て一氣に之を倒さうとする。兩雄頑と構へて暫し動かさず、俄然敵の兇刃は加藤の頭上に伸びて意外にも加藤面を取らる。併し未だ我等は加藤に期待を捨てず、されど悲惨！ 加藤籠手を取られて退く。副將大原奮然

として起つ。颯と一歩退いて構へると見る間に大原の後足動かや、大原の劍先敵の頭上に伸びて！ 面あり、見事な面！ 満場其の美技に感嘆した。されど以後敵、手負獅子の如くあばれ出し、大原善戦すれども手元定まらず遂に敵に涙を呑む。大將山本味方に残るは我一人、母校の名譽！ 赤鬼魂！ 我如何にしも勝たねばならない。颯と一歩退いて正眼に構へ、敵の手元を狙ふ。頭にヒラメクは母校の名譽、校友會諸君の熱烈な後援の顔だ。エイ！ 氣合諸共敵の右横面へ！ 面！ 嗚呼！ 我一本先取せり。後一本も一氣にと思ふ瞬間敵の兇刃我が胸へ、如何せん、我が苦手の胸防ぎかねて一本。一本取るよと思へば又返さる。併し我遂に之を倒し、次將をも倒す。敵する／＼と近寄る。此の機のがすものか、片手横面、体浮かしながらも必死の一撃！ 見事きまつて一本／＼となる。敵又も近寄る。我上段より一氣に籠手へ！ 籠手！ 我自信に満ちて聲かけれど審判見えざりしか？ 輕か

りしか？「うゝむ！」とうなつて試合は續けられた。敵喜多一氣に試合を決せんとしてか減多打に来る。瞬間敵籠手へ、籠手あり。萬事休す！ 又もや我等の奮闘効なく勝を八幡商業に譲るとは悲惨なりし此の最後！ 眞劍なる土用稽古に引續き九月以來の猛練習の結果が斯くも悲惨なるものは。神よ！ 我等に幸與へよ！ 續き来る縣下大會には我等に幸與へよ！

第十七回縣下中等學校劍道大會出場記

九月二十五日、最終の試合が来た日だ。實に我等にとつて記念すべき日だ。此の日の試合を最大目的として銳意斯の道に進んで来たのだ。願みれば雪の影未だ消えやらぬ三月以來、先輩を送りしその補足にへと邁進し、夕陽金の尾をひいて比叡の峯に沈む頃、流汗淋漓膚を濡らし、夕闇金龜城下を蔽うて城山の鐘聲鏗然として響き渡る迄腕を磨きしこと幾

月幾歳ぞ、思へば之も夢、彼も夢、今となつては總べて過去の夢だ。我等は唯運命の神のままに日頃の手並いざ示さん。本年より試合方法を變更されて三戰二勝者が残る事となつた。戦績次の如し。

第一次戦

大津商	本校
芝原	加藤
岡本	山本
榊山	平居
永野	大原
吉川	清水

大商何者ぞの意氣で立向つた。先鋒清水常の如く面を攻めれば敵の構堅く籠手、胴を切られて退く。次將大原冒險的に攻めれど何時もの元氣なく之亦敗る。我等は決心した。後三人で如何しても勝たなければならぬ。顔面蒼白、中堅平居用意に用意して敵の隙を狙ふ。無氣味な沈黙數秒エイ！ 烈破の氣合平居の口より出づると見

るや、ビュー！ 手練の一刀敵の胴を見舞つた。敵啞然！ 体の崩れを直すと見る間に又も一刀彼の面へ見事！ 續く山本敵の手元を攪亂し矢繼早やに籠手！ 胴！ 同點！ 我等の運命一に大將加藤の上にかげられてゐる。加藤の心中や如何に！ 兩將睨み合ふ！ 一分の隙なし。數秒！ 敵何處に隙見出しけん、大きく振かぶつて面へ！ 加藤如何で切られんやバツト外して返す刀で逆に敵の面へ切込む。面あり！ 我等の陣營ホツトする。見る間に敵又も面へ！ 加藤如何しけん、後へ／＼と退く瞬間、敵その虚につけ入り面を切る。後一刀、兩將の顔面筋ビリ／＼、目と目は火花を知らず、たちまち鏝せり合ひ！ 加藤得意の退り胴！ 敵の体思はず崩れる。我等の視線は期せずして審判の手へ！ 嗚呼！ 何たる皮肉ぞ審判モウ一本！ 冷靜な聲だ。敵籠手を切る、加藤之に應ずれども及ばず……嗚呼！ 萬事休す。

虎姫中 本校
北川 加藤
寺居 山本
西川 平居
小野 大原
中川 清水

先鋒清水一次戦の雪辱を決して鋭く切り込む刃——酬いられず一本とりしが再び涙を呑む。次將大原前とは見違へるばかりの元氣で此度こそはと戦へば、敵手足も出ず足下に伏す。平居全勝の勢を以て戦ひしかど……

副將山本無念の形相物凄く一太刀々々々鋭く切込む。敵は副々としてあはれ出す、然し山本正眼の構を崩さず隙を見て切倒す。再び同点となる。大將加藤敵將打來たれば退き、退けば打つ——噫！此の一戦こそ我等が四月以來の辛苦が報いられるか否かの分岐點だ嗚呼！無念！敵將何をか語らん許せ！校友會諸君！我等の慘敗を！前途洋々たる諸君は此の慘敗を胸に刻して

を啞然たらしむ。彼が長身を利して飛龍の如く飛びかゝる。面こそ實に見事なる腕の牙え亦彼の得意の業なれ。敵二名を斬り伏せ稍疲勞を覚えしも尙勇敢にたつて中堅太田に對し遂に籠手を斬られて涙を呑む。續く平井猛然床を蹴つて太田に襲ひかゝる。彼盛に面、籠手、胴に變化し敵に攻勢の連あらざらしめ、何なく面と胴にて敵に名をあげしめず。やがて敵の副將中尾と刀を交へ先づ面にて一本を取れば俄に敵陣亂れ起ち、しきりに同志を勵ます。中尾之に勇を得たるか奮然平井に逆襲す。彼よく戦ひしも遂に敵刀に倒る。中堅大原餘軍を粉碎せんものと形相物凄く、颯と引いて敵陣を窺ふ。果然白熱戦の火蓋は切られぬ。大原小寇者なるも腕に自信あり。彼先攻に出で激しく面と退り胴に猛撃を與へ何なく敵を斬る。敵御大上林一校の運命を此の一闘に託して悠然追らず、大原劍先に全精神を籠め加ふるに赤鬼健兒六百の意氣を背にして突如胴に飛び込めば手許は決つてお胴一本

來年こそ金龜城下七百健兒の意氣と名譽とを發揚されんことを切に希望します。

同志社高商主催全國中等學校優勝劍道大會出場の記

武徳殿大會に於て關東の俊銳靜商に破れし我等は、それ以來奮然猛練習に次ぐに猛練習を以て開始せり見よ！劍風熱を吹き騰然たる劍聲道場を搦すを。これぞ我等青年劍士の否金龜城下に殺へられし赤鬼魂の雪辱に燃え盛る現はれにあらざして何ぞや？嗚呼遂に宿志を爆發せしむる好機來る好機到來！それは九月十八日同志社高商に開かるる第二回全國中等學校優勝劍道大會なりき。いで此の機を逸して可ならんや。我等倒るとも彦中精神の榮譽の爲に、彦中劍道部の意氣の爲に、大いにフアイテングスドリットを發揮して最後迄奮闘せん。たとへ天下に強豪、古豪並に立つとも、此の悲壯なる我等の意氣を以てせば何程の事やあらん。大會當日戰備をととのへ

！之に勇を得し彼猛襲に猛襲激闘に激闘せしが無念軽く揚籠手を打たれて退く。次に續くは古武者山本！千軍萬馬の眞只中を馳驅したる彼が技倆こそ期待に餘りあれ。彼眞正眼に構へて暫し亂れ勝なる敵將の呼吸を計る。嗚呼風の前の静けさと突如危し手負ひの敵將刀を眞向面に構へつづ氣合諸共猛然彼に突進山本之を軽く避け同時に間髪を容れず敵の面に飛び續いて籠手を制して遂に我軍に凱歌揚る

第三回戰（京都桃山中——本校）本校勝

桃山中は二回戰に好成绩を得其の餘勢をもつて我を一撃の下に居らんとする大野心家なれば相當の苦戦は逸れず。果然火花を散らす熱と意氣との決戦は展開されて行く。

桃山中 ○本校
水谷 ○清水
小西 ○同
同 ○平井
千賀 ○同
副竹本 ○同

一路京洛へ、京洛へ 嗚呼遂に戰機熟す。嗚呼心地よや三尺の竹刀風を切りて舞ふ。今當日の龍虎相搏つ戰績を左に述べん。因に當日此の演武に参加せし者實に二百三十劍士校數にては四十六校なりき。

◎第一回戰（甲陽中——本校……不戰勝 阪神の雄甲陽中は好敵手なれども不參の爲先づ第一回戰を無手勝流にて突破。

◎第二回戰（神戸三中——本校……本校勝 神戸三中 本校

水谷 ○清水
浦野 ○同
太田 ○同
同 ○平井
中尾 ○同
同 ○大原
上林 ○同
同 ○山本
同 ○加藤

先鋒清水劈頭より敵の面に亂撃を加へ、敵

竹本 ○大原
大西山 ○同
同 ○山本
同 ○加藤

我が先鋒清水ばつと立上るや敵に寸隙を與へず面を斬れば水谷身の危險を覺つて面に備を固くし斜左に寄つて清水の胴を狙ひ、一太刀は斬られしも、又も意氣を恢復し体を落して素早く籠手を斬る。敵次將小西仇を報ぜんものと彼に急追撃。彼善戦せしも多少疲勞の爲憤死。平井得意の操劍をもつて敵を最初から壓し續け小西を斃し中堅千賀に肉薄すれば彼が腕愈々冴ゆ。千賀も彼が鋭刀を逸れかね風伏すれば副將竹本決死の意氣を顔面に滿潮せしめ刀を斜右にとつてギリ／＼と襲ひかゝる平井二人を斬り斃せし後なれば疲勞甚だしく不幸竹本が伸び來る面と籠手を防ぎ兼ねて退く。よく戦ひしぞ平井。此の仇必ず我打たんと口には出さねど心に必勝を期したる大原俄に敵が面に強く斬り下し一本を先取して

意氣衝天敵斷然壓せられあかも彼が獨り舞臺の感あり。敵軍盛んに同志を勵まししも我が攻撃益々急にして遂に竹本を塲の片隅に壓し籠手に突進して勝を擧ぐ。愈々向ふは敵將西山、流石一軍の將たる者悠々構へて迫らずあせらず、隙あらば彼得意の素早な横面を大原に加へんとす。彼巧に避けて空を打たしめ刀を交ふる事十數合、されど技倆優秀なる敵將に面と籠手を斬られて憤死。山本よき敵御座んなれと敢然彼が氷刀を敵の面、籠手に打落す「面!!籠手!!」氣合鋭く斬り込めど輕き爲か……併し山本初めより歴倒的に出で

大いに武道精神なるフアイテング・スピリツトを發揮し幾度か敵膽を寒からしむれど武運拙く惜しくも敵手に斃る。嗚呼遂に大將加藤の出馬を餘儀なくせるに至れり。加藤相正眼にとり敵刀先を通して鋭く兩眼を射る。西山勝に乗じて一刀に斃さんと身低けれど堂々たる体驕を持ち、面の紐を靡かせて進み來る狀何ぞそれ壯なる。技に於て敵優り居るか知

らざれども銳氣に於て彼に劣らじ。彦中か? 桃中か? 兩學舎の榮譽を此の一闘に賭して龍虎相搏つ一大決闘を茲に演ぜんとす。敵將若白なる顔を引きつらせ我が將の胸に飛び込まんとせば瞬間加藤得意のぬき面を一本。同時に互に寄り鑢を合し彼我が將の籠手を斬る。かくて最後の一本。嗚呼此の一本。此の貴重なる一本。兩將の心中や正に察す可し。暫時白熱戦を演じたる後、敵の寄り迫るを引きはづし、更に追ひ込んで見事な籠手を斬る凱歌は我軍に。

(準々決勝)

第四回戦(大阪北陽商—本校)本校負

壽	○	清	水
同		○	平
前	田	○	同
福	永	○	同
清	水	○	同
同		○	大
中	尾	○	原
		同	

大阪北陽商之ど本年度武徳大會に全國群雄を制して堂々準優勝迄出場せし俊銳。煙都の驕兒何者ぞ! 來れ赤鬼魂の眞價を見せ呉れんかくして鞍馬の山麓に暮色迫る頃壯烈なる準々決勝の幕は切られたり。清水善戰せしも恨を呑み續く平井斬つて斬つて斬まくり、またく間に敵先鋒壽、次將前田、中堅福永を彼が豪刀の下に伏せしむれば我軍俄に活氣付き敵軍顔色なし。平井の功や眞に賞讃す可し。彼尙副將清水に對せしも惜くも敗れ、我が中堅之が仇を報ず。大原、清水を胸と籠手にて斃し、遂に大將中尾を屠らんと急追撃を開始せしが無念敵の斬り來る籠手を防ぎかねて惜敗。我が副將山本之を粉碎せんと千變萬化秘術を盡して奮闘せしかど、調子悪く抜き胴二本をぬかれて惜敗。大將加藤此處を最後と物凄く攻撃し亦もや一本、一本の熱戦を演ずれば觀集皆此の好試合に酔ひて場内靜かなり。

中 尾 ○ 山 本
同 ○ 加 藤

加藤善戰好試合を長時間けしも無念なり籠手を制せられて遂に我軍惜涙……

併し大將加藤の奮戦こそ實に目覺しきものなれ。負けて恥ぢざる好試合と我等は信ずるものなり。

諸君!! 我等は惜しくも準々決勝に於て是の如き惜敗を爲せり。併し大いに彦中魂を此の試合に於て吐露したるを信ず。只優勝の榮冠を得ざりしを恨むのみ。

柔道部々報

第三十三回青年演武大會

出場の記

櫻花爛漫と春を飾り若人未だ春陶の夢醒めやらざるに我が彦中柔道部は斷然起ちて猛練習を開始したりき。續く年々の惜敗我等の心中には彦中の歴史に對する責任感を以て充滿

せられたり。彦中柔道部の多年の不振を挽回する者は我等彦中柔道部選手に他ならず。我等は此の信念を以て幾多の苦痛を物ともせず練習に練習を重ね難難辛苦を乗り越えて、只管技倆の向上に努力せり。

かくして嗚呼時機到來、我等の鶴首して待ちし時機は遂に到來したりき。

七月二十七日、嗚呼我等は京洛の巷大日本全國青年演武大會に駒の歩を進めんとす。我等の心中には何物かの躍動せるを覺えき。

いざ!! 強敵、來らば來れ!! 我敢て恐れず我等の畏るるは唯我が校の貴き歴史を汚さん事のみ。我等は己の腕に強き自信の念を抱きつつ諸先生及劍道部諸君の熱誠なる御見送を受けて彦根を發す。戦はん哉、戦はん哉。

二十八日個人試合成績
東之部 組合
一三二回 本 兵庫柏原中 校 × 西島輝雄 二級
尾松賢晃
二四五回 本 兵庫神戸中 校 × 島本真三 一級
岸 武男

四二六回 本 山梨師範校 ○ 橋本末藏 初段
山口澄江
五二〇回 本 宮崎中學校 × 山口隆彌 二段
兒玉光義

西之部 組合
一三五回 本 鳥取一中 校 × 上田敏夫 二級
安富隆
四四八回 本 山口防府中 校 ○ 柴田正巳 初段
松廣嘉男
四六一回 本 島根太田中 校 × 大西三良 初段
山根春次

個人試合の成績芳しからざれ共、此ぞ所謂小手調、大事は明日なりと互に自重し合ひて明日を待ちたり。

然るに、あゝ計らざりき、我等京洛に來りて而も京洛の強豪京一商と組まんとは!! 我等強敵を恐るに非ざれ共多年の恨今茲に雪がんとせしに、神我等の心中を察し給はざるか第一回戦より京洛の覇たる此の強敵と組とは然れども事定まりし上は已むなし。我等は之を神の試練と思ひ、ベストを盡して戦はん事を誓ひぬ。

戦期熟す、戦の幕は切り落されたり。

先鋒 島本 眞三(一級) × 麻田 三郎(初段)
 次鋒 柴田 正巳(初段) × 宮本 繁雄(ク)
 中堅 大西 三良(ク) × 清水 九藏(ク)
 副將 橋本 末藏(ク) — 〇 小林 祥助(二段)
 大將 山口 隆爾(二段) — 〇 中井 又一郎(三段)
 敵は三段を御大とする大兵剛の者揃ひにて今年の大會に優勝たらんとする野心満々たり我等の小兵なるをあたどるの色、眉宇の間に明なりき。こゝに到つて先鋒島本敢然奮怒すべく戦ふ。然るに戦の時間短きたため島本充分實力を發揮し得ずして引分となる。

次鋒 柴田 次いで出でしも相手は大兵、柴田功を焦り過ぎて技定まらず又引分となる。續く中堅、大西、我勝たざれば勝算なしとや思ひけん、猛然立ちて最初より攻撃を始めたるに敵よく之を避く。大西寝技に得意なるに京一尙亦寝技に強しと聞きて立技にて之を攻めたりしが悪しかりけん。功を奏せず引分となり、大西無念の想を残して下る。

續く橋本敵は大兵二段の剛の者而も之に勝たざれば我等萬事休すのみ。彼の心中誠に悲壯なり。彼奮然戦ひしも敵の下となりあと五秒にてタイム終らんとする時足を抜きて抑込まれ敵をして貴重なる最初の一點を挙げしむ次で大將山口起ちて敵三段に應戦せしも實力の相違如何ともし難く遂に抑込まれ根を呑んで退く。

彦根高商主催第九回
 近府縣中等學校柔道大會
 出場の記

土用稽古以來、來るべき縣下大會に覇たらんと、涙と汗その物の奮闘を續け、此處に一段の進歩を得たり。此の進歩、此の技倆を示すべき大會は來たりぬ。
 九月十八日、快晴!!
 我が赤鬼健兒の名譽と歴史の爲に、我が不振なる柔道部の再興を期し、我が力を信じ、意氣揚々と登校せり。

到れば即ち、前年の優勝校たる、本年の我が武徳殿に於ける仇敵京一商を始めとし、廿有九校相集れり。
 有志諸君の聲援に送られ第一回戦出場
 第一回戦

本校	八幡商業
先鋒 橋本 末藏〇	重野 道夫
ク	中川 博夫
次鋒 柴田 正巳	池田 謙吉
中堅 大西 三良〇	押込 大林 勉
ク	浅井洋一郎
副將 山口 隆爾	
大將 島本 眞三	

先鋒橋本敵に比すれば、實に眇然たるものなり。然れども機敏なる彼は敵の内股の攻撃に乘じ移腰の妙技!! 敵の巨體をして技も美しく投げ飛ばしぬ。觀衆をして自ら聲を發せしめたり嗚呼!! 痛快なる哉!!
 此れに依り、意氣いやが上にも揚り、常に敵を壓して副將、大將を残して勝てり。

第二回戦

本校

長濱商業

先鋒 橋本 末藏〇	大外	松村與四夫
ク	大外	石倉朝太郎
ク	背負	荒尾 藤助
次鋒 柴田 正巳〇	背負	朴 煥 述
ク	〇	右野 利雄
中堅 大西 三良〇	ク	
副將 山口 隆爾		
大將 島本 眞三		

亦々橋本の奮戦物凄く、來る二者を手玉に投げ、中堅と引分。續く柴田得意の背負投にて敵の副將をして名無からしめたるが武運拙く大將に破らる。大西よく肥體を利用して大將を完全に抑込み萬丈の氣を吐く斯くして再度の凱歌を擧ぐ、此の二戦に依り、愈々我が力を知り昇天の勢ひなり、残るは唯八校のみ月桂冠は目前に近づきたり。

本校

大垣中學

先鋒 橋本 末藏	大外	〇市川 春男
次鋒 柴田 正巳	ク	
中堅 大西 三郎	ク	岡崎 正三
副將 山口 隆爾〇	抑込	小森 秀夫
ク	抑込	川合 弘
ク	〇	〇衣斐 三郎
大將 島本 眞三	ク	

橋本疲れてか奮戦せしも敵の槍玉に揚げられたり。柴田一舉に挽回せんと猛然と攻撃に出でしも引分となる。續く大西怒氣満面、猛然と立ち、攻撃々々!! 亦攻撃!! 渾然の力を振ひ死物狂ひの奮戦!! 併し引分となりぬ。續く山口、悲痛なる顔!! しっかりと禮をするや奮然と戦ひ、猛虎を手捕るが如く、荒れ狂ふ敵を抑へたり。次に來る副將奮迅の勇を示しも山口の奮闘目醒しく終に凱歌を揚げたり。續くは大將也、之に勝たずとも引分さへすれば勝は我にあり、それ故か山口攻撃に出づ敵は防禦に努めたり、此の作戦悪しかりしか業有

り二本取られ、涙を呑んで退く、後十五秒にて引分の合圖はありしに!! 嗚呼!! 何たる運命の悪戯ぞ!! 十五秒にて我が敗北とならんとは!! 島本奮然と立ち、秘術を盡して戦へど敵は老練を極め、ビクともせず終に引分となり、代表試合を行ふ事になれり。

縣下武道大會出場の記

彦根高商に於て惜敗せし我等は、縣下に覇を稱へんとして猛練習を重ねり。特に五年生にとつては最後の試合なるを以て、彼等の稽古振りは涙含ましきものなりき。四年生も我

等が見等をして、最後の茶冠を得せしめんも
のと共に放課後遅くまで練習を積む。

時は来れり。九月二十五日!!
此の日我等は必勝を期して膳所中學に向へ
り。

第一次戦

第一回戦

木 校 栗田農學
先鋒 橋本(初段) × 島本
次鋒 ○柴田(ク) | 池田
中堅 ○大西(ク) | 馬場
副將 島本(ク) × 黒川(初段)
大將 ○山口(二段) | 正田(ク)

第二回戦

本 校 八日市中學
先鋒 ○橋本 | 外村
○柴田 | 井田
大西 × 宇野
○島本 | 宮川(初段)
大將 山口 | ○森島(二段)

第二回戦

本 校 大 商
先鋒 ○橋本 | 山本
○柴田 | 内田
○大西 | 桑田
○島本 | 岡本
大將 山口 | ○浅川(二段)

見られよ!! 我等が奮闘の結果を!!
我等は斯くして斯の如く悠々と第二次戦に
進めり。抽籤の結果我等は湖南の雄滋賀師範
と矛を交はすに至れり。

おゝ我等は終に来るべき所に來りしなり。
併し我等の意氣如何でか失せん。よき敵ごさ
んなれ、とばかり武者振ひせり。此の敵を倒
さば優勝確實なり。優勝戦と思ひ全力を盡さ
ん、と互に肩を叩きて勵まし合ひき。

先鋒橋本先づ一點を得んと猛然として立つ
兩雄滿を持して技を掛けず。睨み合ふこと數
刻戰機熱せり、敵將先づ第一彈を放つ。橋本
巧みに之を避けて、復も動かさず。と見るや敵

小柄を利用して、つゝと我が懐に入り背負投
極り、橋本退く。次將柴田得意の背負投もき
かず、敵に又もや一點を與ふ。續く中堅大西
偉大なる体軀を利用して、小兵の敵を壓し得
意の寝技に引込みしが、敵將猛然と起きて、
我を抑へ込む。大西全力を盡ししも遂に一本
續く副將島本我勝たずば我軍敗ると、悲壯な
る決意を以て立つ。彼獨特の背負投を連發し
大兵の敵將を屢々おびやかもしも、敵の爲に
斃る。大將山口樂々と敵を敗る。

本 校

滋賀師範
先鋒 橋本(初段) | ○市村(初段)
次鋒 柴田(ク) | ○前山(ク)
中堅 大西(ク) | ○赤田(ク)
副將 島本(ク) | ○西村(ク)
大將 ○山口(二段) | 岡本(ク)

おゝ我等は敗れたり。雄圖空しくして終に
老巧なる滋賀師範に敗れんとは!!
思へば伊吹風寒き春の朝より赤熱鉄を溶す
夏の夕まで血のにじむ稽古に、戦友互に勵ま

し、柔道着の袖をしぼつて幾星霜、而も一度
も名を得ることなく、今日の最後の試合さへ
敵に名をなましむるとは!!

行幸記念武道大會の記

昭和五年十一月十三日、今上陛下の御父君
に當らせらるゝ先帝陛下には、嘗て此の十
三日に當地に行幸あらせられ大本營を本校に
定め給ひき。此の記念すべき日に武道大會を
開き最も有意義に、此の意義ある日を過せり
因に大會の記録左の如し

第二學年高點試合

中野 精二 × 島津 亮二
龍田 芳信 × 中村 隆
○瀧上 郁夫 | 木原 大猷
○同 | 夏原 幸雄
○同 | 竹林 博
同 | ○東 實哲
成宮 信雄 | ○同
山本 高雄 | ○同

小菅伊三門 × 東 實哲
○高野瀨弘演 | 勝田 敬三
同 | ○近野 長一
近野 長一 | ○林田 實
○近藤 悦男 | 同
同 | ○川村 甚郎
前田 利一 × 同
中堀 正雄 × 清水 真作
森 義夫 | ○富士原 知
中村 健三 × 同
○京極 徳雄 | 伊藤 信照
同 | 中村晋次郎
同 | ○三和 碌郎
○高橋 彰吾 | 同
同 × 松村 惠喜
光友 正 | ○福川重太郎
○岡庭 益男 | 同
同 | 林 榮一
同 | 安澤 哲男
加藤 默音 | ○山口 繁樹

松宮 久延 | ○同
伊藤 芳男 | ○同
○福田 隆治 | 同
○同 | 北川 真一
○同 | 那須 龍誠
同 | 國領太刀雄
同 × 瀧上 昇
○伊吹 義雄 | 保藤 義三
同 × 河村 達夫
藤井 莊六 | ○朝奏 隆夫
○小財龍太郎 | 同
同 | ○北坂 徹男
寺澤 定男 | ○同
○松本 字一 | 同
同 | ○宮川 清
杉山十三雄 × 同
吉田 庄一 × 上村文太郎
野村 忠吾 × 同
第三學年高點試合
瀨理 大仁 × 森原 嘉雄

のコンジョンンに見舞はれ、我等の力をため
さんとする高商の競漕大会は来りぬ。吾等は
當日午前八時迄に港灣の艇庫に集合せり。當
日は別に滋賀師範奉公團主催近府縣中等學校
端艇競漕大会ありき。故に吾等が力をためさ
んとする敵少く唯大津商業一校のみ来れり。
吾が校は大津商業に昨年此の大会にも全國大
會にも破れ、涙を呑んで退きたり。吾等は此
處に其のうらみを一時に晴らさんと意氣天を
つけり。時に午前十時大津商業は吾が第二選
手と戦ふ事になり、第一選手は第一回戰獨漕
ときまる。吾が第二選手は練習日尙淺く、わ
づか二週間ばかりの練習にて強敵大商とベス
トを盡して彼に破れたり。第一回戰獨漕の吾
は悠々ゴールに入りて大商と同タイムなり。
吾等は午後の優勝戦にそなへる爲、一時本校
の武道場にて休息しその作戦をなせり。いよ
／＼作戦きまり大商と戦はん爲港灣に急ぎぬ
大商はすでに自信ありげに吾を待てり。吾等
は元氣一杯シードにつけり。用意はよろしい

か？の聲、準備完了！！嵐の前の静けさ！！其
の静けさを破つて一瞬！！ドン！！俄然火蓋は
切られぬ！！吾はスタート悪く彼に半艇身お
くれたり、然れどもあせらずロングビツチに
て彼を追ふ。作戦により我は彼をミドルにて
ぬかんとしてコックスの聲と共に力漕す。吾
が艇急に進み、彼と平行す。彼又急ビツチに
て逃ぐ。吾等はベストをつくす。ラストヘビ
ー！！あと三十本！！吾等は夢中にて漕げり。
拳銃一發、見れば彼は吾に先んじてゴールに
入れり。我彼に遅るゝことわづかなり。
嗚呼無情なるかな、天命なり。然れども我等
は心中にて男泣きに泣けり。斯くて今年も敗
れたり。我等の雪辱も此處に實を結ばざりき
あゝ如何せん、六百の健兒並びに先輩校友の
御聲援を深く謝するのみ。顧みれば吾が校の
創立古く昔では我が端艇部の名は全國に知れ
渡りき。然るに今は其の影もなくおとろへた
り、六百の健兒よ、あの監督室の寫真を見よ
！！そして先輩の意志をつぎ、吾が端艇部を

第三高等學校主催春期關西 中等學校競漕大會出場の記

去る高商の大會に不覺をとりしより、我等
は文字通り猛練習に猛練習をかさね、赤銅の
腕をさすり、ひたすら時の來るのを待てり。
時は來りぬ！我等の腕を試すべき時は：
……それこそ三高主催のレースなり。
六月十九日、我等一同は意氣揚々部長引率の
もとに一途瀬田川に趣く。會場に着けば、早
くも敵、奉公團A、同じくB、C、御影師範
既に到着し居たりき。我等は元氣満ちて、必
勝を期しぬ。恨多き瀬田の流しづかに、日は
煌々と照り、絶好のレース日和なり。
午前十時半、昨年度優勝校奉公團より優勝
旗を返還し、十時半抽せ、入行はる。一同奉公

團或は御影師範と戦ひ十二分に我等の實力を
示さん事を誓ひぬ。かくて抽せんの結果終に
奉公團Cと第一回戰に於て争ふことになれり
我等の失望大なり。されど小敵と見てあな
どらず、自重して、スタートにつく。我等の
意氣既に敵を呑む。號砲一發！兩艇等しく
スタートす。自重、自重、敵スタートのすべ
り出しよく聊か我先んず、されど、我は悠
々として練習の積りにて、モーション大きく
ロングビツチにて進む。唐橋を過ぐる頃、敵
既に進行にぶらんとす。此の時我力漕五本を
以て、敵に先んじ、ラストヘビー物凄く、堂
々とゴールに入る。

彦根中學 一コース 一着 五分四三秒
奉公團C 二コース 二着 (差五艇身)

連はひたひたと敵をたゞく。號砲一發天高く
轟けば、二艇は突進したり。と之れ如何に、
敵は半艇身を先んじたり。果して、敵スター
トにて勝たんとするか、我は斷然ミドル主
義をとり、オール折れよとばかり一本々々力
漕して尾行す。日頃の猛練習のかひあつてか
我が漕手平靜たり。早くも味方の勝利確實な
るを知る。第一カーブ通過、敵の艇歩にぶる
を知らず、得意の急調を以て、ひたすら突進
す。我は？ 依然半艇身後れてこれに續く。
蓋し、期する所あるを以てなり。第二カーブ
唐橋通過！「ミドルヘビー二十本！」敵に先
んじて叫ぶ。おゝ！よしッ來ター！」と應ず
る漕手の聲！おゝ！！見よ！俄然我が艇の急
速に進み出でたるを！！見る見る敵とトツプ
を並べたるにあらずや！！これに驚き彼急調
を以て應ぜんとす。併し彼既にあせれるを如何
せん「此處三本！」我がスタート斷然効を奏
し、悠々一艇身を先んず。見れば、ゴール間
近にせまる。「ラストヘビー三十本」我が艇一

段と艇速を増し、ゴールにせまる。敵は？
名に聞えし奉公團なり。流石ラストヘビー凄
く、その聲刻々我に近づく。されど時既に遅
し。我最後の力漕を以てゴールに入る。あゝ
我終に勝てり。敵ながら彼のラストの凄さよ
！！
彦根中學 一コース 一着 五分二八秒
奉公團B 二コース 二着 (差半艇身)
第三回戰は怨敵勝中なり。何ぞ忘るるを得
んや、昨年この大會に彼の爲に涙をのみしを
今こそ雪辱の機なれ。一同必勝を期して艇に
乗り込み、スタートへ急ぐ。逆風はげしくな
り、稍々コンディション悪し。されど「何事
やあらん」と一層の元氣を以て、スタートに
着く。號砲により兩艇のブレード等しく水を
打つ。敵艇すべり出しよく、先づ、三シート
我に先んず。我依然として、尾行主義をとる
スタートを過ぎ、敵あせり氣味にて、早くも
進行にぶり、加ふるに我が尾行主義に惱まざ
れ増々あせる。我悠然としてロングビツチを

以て敵を壓して進む。第二カーブを過ぐる頃
彼完全に疲れ、はるか後方にあり。殆んど「ラ
ストヘビー」の必要を認めざるばかり悠々と
して我ゴールに入れり。

あゝ！ 終に我雪辱するを得たり。されど
あまりにも彼の意気地なきを遺憾とす。我等
が意氣彌々高く、餘る奉公團Aをも一蹴せん
と優勝戦を待ちて退く。

彦根中學 二コース 一着 五分四五秒
膳所中學 一コース 二着 (差三艇身)

優勝戦！ 暮色蒼然と瀬田川の流れを包み
日は西山に没せんとす。終に、湖南の豪奉公
團Aと雌雄を決する時は来りぬ。我等は深
盡なる策戦をこらし、決死の覺悟を以てこれ
に對せんことを盟ひ、艇上の人となり、スタ
ートへ……。

いざ最後の戦！ 今ぞ眞の頑張りを見せん
！！と思ふ間もあらばこそ、おさへにおさへ
られたる燃ゆる血潮は。
突！！ 轟く號砲と共に一氣にほとばしりぬ

全國中等學校石場ヶ濱 優勝競漕大會出場の記

何ぞ忘れん昨年もろくも實にもろくも第一
回戦に破れし残念さ、無念さ我等部員は何ぞ
忘れん。

八月七日會場に到着すれば湖上早くも戦風
うぶぶきて荒々しくも乱れたり。

風はコースに横波をなして戦の困難なるを
おぼゆ。八時三十分開會の辞有り優勝旗返還
式を終りて直に第一噸戦に入る回を追ふに従
つて愈々我等が戦機は熱せり。

午前十一時我等は先輩諸氏及び諸先生の涙
ぐましき應援に必勝を期して乗艇せり。

サリユートをして例の如くランチに繋かれ
てスタートへ向ふ。敵は津中學、松江中學我
等は最初より心をゆるして戦ふに足る。と互
に勵まし合ひぬ。

さて我等は先づ最も馴れたる調子にてスタ

スタートの滑り出しよく、オールの響き、暮
色蒼然たる瀬田川に漲り溢る。敵は？ 彼我
と並行して右にあり。百本……二百本……
：我あせらず更に彼と並行して進む。第一カ
ーブ通過！ 尙二艇トップをそろへて……

第二カーブ唐橋！ 我がコースの最も不利と
する所なり。「此所三本！」我が艇速頓に増し
あはよくば彼をリードせんとす。彼又さる者
にして、この機のがすべくもあらず、急調を
以て、我に先んぜんとす。「ミドルヘビー二十
本！」之に應ずる漕手の聲！ 我機先を制し
て、一舉、リードせんものと、力漕！！ 又力
漕！！ 見よ！ 我がトップのツツと！ 出で
行くを！ されど彼流石名に負ひし豪の者、
刻々我を壓し来る。ミドル過ぎ！ 我等は此
所ぞとばかり、力漕又力漕！！ 應戦又應戦！！

あゝ如何せん！ 朝來の連闘の爲め、やう
やく、疲勞の色あるを！！ 敵終に一艇身先ん
じたり。我等は唯餘す所は死を賭して戦ふあ
るのみ。ラスト前！ 然るにあゝ！！ 彼更に半
イートにつきぬ。敵二艇は共に我等がストロ
クサイドに之を見る。
此の日のコンデイションは、前述の如くコ
ースの横より可なりはげしい風を受くる爲に
敵二艇のゲイを掴むに困難する様を、悠然と
ながめたる我が漕手を實に心強く感じぬ。
いざ準備完了！！ 風の前の静けさ！！ 一瞬！
ドン！！ 俄然火蓋は切られたり。
急調を以て得意とする松江中學はすでにス
タートに於て我より半艇身を先んず。
津は？ おゝこれも亦我がトップを壓して
やゝ我より先んず。然らば我艇は？ おゝ見
よ！ 我等が漕手の平靜なる様を！！
「五百米突通過」三百米突迄先んじたりし
松江中學は最早すでに我に後るゝ事一艇身亦
津もすでに我等が後方に有り、我等は歡喜の
胸を以て、胸ものびよ、オールも折れよ、と
ばかりに得意のストロークで、強引に強引を
重ねぬ。

「ミドルヘビー此處二十本」「ヨージツ」漕

艇身を………。無念！！「ラストヘビー後三
十！」「死ね！ 死んでしまへ！！」我等の決死
の努力も、あゝ、ドーン！ ゴールイン……
……。「後三本！」我等は最後まで戦ひ
ぬ。然れど体格の相異如何ともする能はず、
茲に萬事休す！ あゝ命たる哉！ 吾終に本大
會も覇をなす能はず、唯校友諸賢の御寛恕を
乞ふのみ。

奉公團A 一コース 一着 五分三十秒
彦根中學 二コース 二着 (差三艇身)
因に出漕者左の如し。

- 舵手 西田亮三
- 整調 加藤秀夫
- 五番 久木彌惣八
- 四番 林茂次郎
- 三番 安田晋平
- 二番 深田太郎
- 一番 野瀬元雄

手に一勢に應ずる叫び！！ 見よ！ 依然我艇の
急速なる進行を。我等は既に敵二艇に三艇身
を先んじたり。

「七百米突通過」「九百米突通過」然るに見
よ、津中學！！ 俄然急ピツチを擧げて我に迫
るを、すでに敵の聲を横に聞くを、我等は此
處に於て應戦又應戦！！「サア我等の最後の手
段いで此處ぞ」我等は強引に強引を重ねれど
も、最早我等の力に限りや有りけん。此より
以上の艇速は求め得られざりき。然れども唯
余す所は死を賭して戦ふ有るのみ。千米突！！
一步前に聲有るは津？ 無念！！「ラストだ。
後三十本だ」「死ぬ！！ 死んでしまうんだ」幾
度かくり返し、幾度か激勵し合ひし言葉！！
然るに！ 我等が決死の努力もあゝ早や！ ド
ーン！！ ゴールインの號砲轟く「後三本」我
等は最後迄戦ひぬ。

然れども萬事茲に休せり。あゝ天なる哉！
命なる哉！ 唯校友諸賢の寛恕を乞ふのみ。
第一着 津中學 タイム四分五二秒